

《書評》

福士由紀、市川智生、アレクサンダー・R・ベイ、 金穎穂 編 『暮らしのなかの健康と疾病——東アジア 医療社会史』

東京：東京大学出版会、2022年、278頁

荒武 賢一郎*

Yuki Fukushi, Tomo Ichikawa, Alexander R. Bay, Youngsoo Kim, eds. *Health and Disease in Daily Life : The Social History of Medicine in East Asia*, Tokyo: University of Tokyo Press, 2022, 278p.

ARATAKE Kenichiro

1. はじめに

2020年から新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行によって、世界は数年間にわたって病気の脅威を思い知らされた。生命や医学の重要性は、当然ながら意識されてきたわけだが、よりいっそう深刻な現代的課題として諸分野で積極的な分析が進められたといえよう。そのなかで本書は、過去における健康を主題に、近世から現代に至る東アジアの歴史的展開を詳述した論文集である。

<目次>

まえがき（編者一同）

第1部 健康の語られ方

第1章 「みみちかく、さとしやすき」養生論——近世前期の健康問答（趙菁）

*東北大学東北アジア研究センター

『東北アジア研究』28号（2024年）、125-130頁、<https://doi.org/10.50974/0002000667>

© 2024 ARATAKE Kenichiro

本著作物は、特に記載がない限り、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際（CC BY 4.0）ライセンスの下で提供されています。<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>



- 第2章 健康のための選択——近代韓国における大衆と医療(金穎穂)
- 第3章 健やかな小学生——近代中国の教科書からみる健康観(戸部健)
- 第4章 健康の売り文句——近代上海の肝油広告(福士由紀)
- コラム 人新世的健康観(ハイン・マレー)

第2部 政策と健康

- 第5章 尿尿に対する認識の変化と下水処理化——明治期から戦後の日本(星野高德)
- 第6章 ヒトの健康とウシの健康——畜牛結核対策の歴史(市川智生)
- 第7章 子供の健康と占領政策——日米の文脈比較(平体由美)

第3部 環境と健康

- 第8章 「風土病」をめぐる2つの発見(飯島渉)
 - 第9章 総力戦的予防——日本における住血吸虫症対策(アレクサンダー・R・ベイ)
 - 第10章 暮らし・健康・地域社会——愛媛県三崎町でのリンパ系フィラリア症対策(井上弘樹)
- あとがき(福士由紀)

上記のように健康をめぐる諸相に注目し、「語り」や思想的背景、政策の影響、そして社会的環境といった大きな枠組みを構築しながら、東アジア地域の特質をとらえようとする試みは大変興味深い。「まえがき」で示された視角の整理には先行研究をふまえつつ、人類における「生存の質」や、時代や地域ごとに織りなす諸条件の相違、さらに人類生態学や医療人類学などで培われた健康に関する重要な指摘を、歴史学の立場から検討してみたいという執筆者たちの問題意識が浮かび上がる。それでは、以下において各章の要点を述べていきたい。

2. 各章の概要

第1部には論考4本とコラム1本が収録されている。「健康の語られ方」というテーマが的確に伝えるように、ここでは近世から近代における日本・朝鮮半島・中国の事例をもとに、人びとの中で健康をどのようにとらえ、言葉として発せられてきた経緯を述べていく。基本情報になるのは、近代を迎える東アジアで西洋由来の知識や価値観が含まれるようになり、その受け入れの可否はともかく、「新たな文明」を意識していく社会の様相であった。加えて先行研究の系譜からすると、このような思想的基盤の考察は国家の政策基調や、知識人の言説をテキストに進められることが多いなか、本書では「語りを享受した人びと」の社会的位置や、その教養や心性をのぞき込もうとする試みが展開されている。

第1章は、日本における健康観のルーツと呼べる「近世養生論」に着目し、江戸時代初期の『養生問對上』を取りあげ、庶民層の「健康」認識や、養生書の著者と庶民の「問答」形式を考察しながら、知識の供給と受容によって健康の自発的管理が成立したことを紹介する。筆者の詳しい分析によって気付かされるのは、健康観の社会的共有が識字率の上昇や書籍出版の飛躍的普及で実

現に近づき、生きていくなかでの「知恵」の浸透が図られた点である。また、中国の影響を受けた古代以降の儒教・道教・仏教に関する原理をひもとき、近代以降の展開を視野に入れた訳語の成立や普及という長期を見据えた論説も読み応えがあった。

これに続き近代の事例に移るが、第2章には近代韓国の日常的な健康問題への対処が分析されている。伝統医学が強い朝鮮半島においても、1876年の開港以降、本格的に導入された西洋近代医学が公的に認められていき、医療システムの拡充について研究が積み重ねられていた。一方で、筆者が指摘するように大衆の医療実践を子細にみていくと、近代医療のもたらす身体の規律化だけですべてが完結するわけではない。この論考の問いかけは、庶民たちが病気に対してどのような対処をしたのか、また健康の回復や維持への意識が展開していく過程を明らかにすることであった。対象の時代や地域が異なる前章との共通点は、近代韓国における政治および社会の変革期に、医療・衛生の分野で人びとが認識していた健康の選択を追究したことだと感じる。具体的には医療宣教師の存在や、そこから派生する出版物、民間に流布する治療書などを包括的に論じ、西洋医学と伝統療法の併存が当時の社会を支えたことを実証した。

近代世界の社会形成に教育制度は不可欠な要素であるが、第3章では中華民国期(1912～28年)における小学校の教科書から健康・衛生関連の記述を丁寧に考察する。なぜ、筆者がこの時期の中国を分析しようとするのか。それには第一に近代的教育制度と衛生行政が本格的に始動すること、第二に1920年前後の外交方針や社会的動向をふまえると、教育・衛生のあり方は大きく変わっていること、の2点が挙げられ、当然ながら教科書に変化の兆しが反映されるのではないかという見通しを明示する。そして、近世期の養生思想との関係や、同時代の日本における小学校教科書(『尋常小学修身書』)との比較を交えながら、特徴を明らかにしていく。分析過程で興味をひくのは、近世からの伝統的認識と、新たに加わる知識の共存が教科書の内容から理解できる点であろう。キーワードとして挙げられる「飲食」「空気」「清潔」などの基本について、たとえば「清潔なものを飲み食いする」、「広々としたところで散歩する」、「手洗いをする」といった現代の我々から察するところ至極「当たり前」の行動が教育の現場で意味をなしている。もちろん、近代国際社会で共通する記述は多々みられるものの、国家および地域の個性も看取できるところが示唆深い。

日頃から体調維持や疾病予防を心がけるなかで、健康食品の存在は不可欠であろう。第4章は19世紀半ばに西洋で商品化された肝油が近代中国で有数のサプリメントとして普及する経緯と、その原動力となった広告について諸資料をもとに検証していく。上海における肝油の新聞広告を具体的に考察すると、伝統的身体観と近代的知識が混在・融合していることがわかり、それを消費者が受け入れていくという。そもそも広告は、医薬品や健康食品を取り扱う企業の戦略として考えられるわけだが、大量消費社会における人びとの価値観を検討する指標でもあった。本章の魅力的な取り組みは、商品の売り手や説明内容のみならず、背後にある性や身体に対する社会思想的状況をあぶり出そうとする研究手法だろう。我々がよく知るビタミンの効能や、新しく登場する家政や生活様式などを都市中間層が受け入れていく流れはよく理解できる。

コラムでは、ヒトの健康と生態系の関係から、「健康観」と学術的変遷を紹介する。パンデミック

クの発生によって「ワンヘルス」や「プラネタリー・ヘルス」という概念が登場したこともわかりやすく論じている。その示唆するものは、健康と自然環境の接近と、かたや環境が人間の健康に影響することへ人びとが注目していることだ。そこから「人新世的健康観」という言葉が展開していく可能性に言及されている。

第2部の論考3本は、近現代日本における諸政策のうち、「尿処理」「畜牛結核」「子どもの健康保護」を主題にそれぞれの分析が展開された。これは対象地域と時期を絞り込みながら実証するものの、排泄物・家畜・子どもの健康という問題は世界史共通、さらに時代を越えた議論につながる重要性を秘めている。

近代日本の下水道整備は緩慢だったとする第5章では、その原因究明において行政と住民双方の認識を浮かび上がらせ、当時の価値観と衛生対策における理想と現実を明らかにした。筆者によれば、衛生インフラの整備は明治期のコレラなどの流行を契機に喫緊の課題に位置づけられたものの、財政的制約および公共性、採算性への配慮から、交通インフラなどに比べて下水道の優先順位が低く、かたや尿尿の肥料的需要が継続していた。そこには、行政と住民の認識を分析する必要性があり、当時の公文書や新聞記事からの情報を駆使し、社会的合意の形成過程を読み解くべきだと力説されている。

人間のありようととも、家畜の健康観に踏み込んだ第6章の成果は大きいものといえよう。課題としては、戦前日本の畜牛結核対策の経過をたどり、人間の結核対策を基礎に畜牛への考え方を法令・統計・啓発などの事例によって深めていく。結果、日本の結核対策は、畜牛に対して先行実施されたことがわかり、感染牛由来の牛乳の流通などにも規制が推し進められた。また、興味深いのは獣医学研究者、農林省の動向から畜牛の健康や幸福という考え方と、ワンヘルスへの継承という課題への広がりである。

アメリカによる日本の占領統治と、子どもの健康の関係に着目した第7章は、戦後の社会政策を知る手がかりとして極めて重要な論考である。日本の非軍事化と民主化は基本方針としてよく知られているが、当該期の母子保健・学校保健政策と、公衆衛生福祉局（PHW）の担当者たちが見据える思想や経験をつなぐことで、当時の実態が明らかにされていく。当然ながらアメリカ社会の経験を日本に当てはめることの難しさが生じ、PHWスタッフと日本側の対立も顕然となる。一連の過程では、子どもたちを保護するうえで現在でも意識される課題について、母親・家族、医療・保健担当者、諸団体からの提案や反発などが出てくる状況もあり、本章では大きな視座から子どもの健康を考える素地がつけられている。

第3部は「環境と健康」をテーマに、日本を対象にしながらか「風土病」「住血吸虫症」「リンパ系フィラリア症」への対策について考察する。健康への認識とともに、疾病に対する言葉の歴史性、医療体制、社会秩序などの諸側面が明らかにされていく。

日本国内および海外の資料を博搜しつつ、19世紀半ばに「風土病」という言葉が日本でつくられた可能性を指摘した第8章では、その歴史性を詳述する。本章の展開では、「風土病」は幕末期の北蝦夷地で記された壊血病、八重山諸島の熱帯熱マラリアという日本の「辺境」で発生した

病気を指すものとして使われた。それから近代医学体制ができあがるなか、さまざまな感染症のメカニズムが解明され、お雇い外国人や医学生への外国留学の影響から感染症に関する学知を入手していき、「風土病」は固有名詞から一般名詞へと移行する。20 世紀初頭以降、日本人研究者も「風土病」の研究に邁進するが、同時期には「地方病」なる言葉も存在した。加えて、長崎医科大学に東亜風土病研究所が開設され、戦後の 1949 年には『風土病研究』なる冊子も刊行されたようである。

山梨県における日本住血吸虫症対策を論じた第 9 章は、その過程を「総力戦」という視角をもとに展開する。先述の「地方病」として発見された日本住血吸虫症について、当局・医師・専門家のほか、地域の人びとが対策に関与していくが、生活習慣や環境によって解決には長い歳月を要する。予防は、寄生虫のライフサイクルを根絶することが重要であるものの、そのためには地域住民の積極的参加と知識の共有を図るべきで、病気への理解浸透が課題となった。完全予防への道のりは、宮入貝（ミヤイリガイ）撲滅運動、糞尿処理技術の改良をはじめ、農村社会の意識変革による取り組みが実施されるという一連の流れをたどる。

第 10 章は、戦後のリンパ系フィラリア症対策を愛媛県三崎町の事例から解き明かす。この実践には専門知識や技術もさることながら、地域社会の秩序や論理的展開が大きく役割を有し、住民たちの認識変化にもある種の特徴がみられた。本章における筆者の関心は、住民・行政・学者などがそれぞれに感染症をめぐって当地の環境に注目し、暮らしや健康を考えてきたことを総括することであろう。これにかかわる人びとの実像から未来に向けた感染症対策の実効力、さらには我々の認識強化を目指すことにもつながるかもしれない。

3. 本書の成果

編者の「あとがき」では、2014 年度後半から今回のプロジェクトに関する準備が開始され、歴史学のみならず人類学・社会学・保健科学など多彩な専門家との対話をおこない、新型コロナウイルス感染症の苦難を乗り越え、完成された論文集だという「研究の歴史」が述べられている。たまたま感染症流行など時事的関心と重なったようにみえるが、各人ともに医療・衛生・地域社会に精通し、既存の学問領域をまたぐ新たな論点の発見に大きな貢献を果たしたといえよう。多くの研究者がそうであったように、資料収集やフィールドワークが随分と制約され、議論の機会も減少したであろう状況で、重厚な内容の書籍が刊行されたことに深い敬意を表したい。

各章の内容に分け入って読んでみると、執筆者がそれぞれ得意とする、あるいは挑戦してみようと意気込んだ課題に真摯な向き合い方をしている様相はよく理解できた。それを裏付けるのは、地道な資料分析と精緻な実証結果である。たとえば、第 1 章の『養生問対上』における庶民からの質問〔14～19 頁、表 1-1・1-2〕で、「今時の医者は物知りではない人が薬の働きをよく知り、物知りの医者の方の薬はあまり効かない、治療と学問は別物か」や、「按摩（あんま）のやり方を教えてほしい」、さらには「(酒は) 多く飲むより少し飲んだほうが薬になると思うが、少し飲む

とはどの程度のものか」という反応は、歴史世界と現代社会の共通項と考えることができ、人びとが養生や健康といった話題に少なからず興味を有していた事例を紹介する。第4章における広告の内容からは、中国の伝統的家族観で男児を育てて老後に備える「養児防老」、親は「慈」をもって子どもを養育し、子どもは親に対し「孝」を尽くす。広告はそこへ鋭く参入しようとするが、一方でこれが「万人受け」するとは限らない時代の変化を読み取る。このように、おおむね東アジア社会の根底に流れている話を再検証する作業は、今後も必要だと認識させられた。

本書に接して、健康および疾病の考察に近世から近現代という時間を意識した点は最適な選択だった。どのようなテーマでも、近世・近現代の通史的考察へのまなごしは「よくある話」と片付けられるかもしれないが、古代からの系譜を想定しながら伝統と近代をつなぎ、身体や環境に配慮を重ねた研究手法は今後も揺るぎない路線となるだろう。加えて、近代東アジアに急速な西洋化の風潮が押し寄せたとみる向きが多いなか、第2章・第3章・第5章では日本・朝鮮半島・中国のそれぞれに固有の事情を鑑みて、独自路線が選択されていたことがわかる。近世までは中国文化の継承や模倣によって、3地域の足並みが揃っていたが、西洋化との調整をふまえて「落としどころ」を探る近代社会の個性を知ることができた。これは健康を主題とするなかで獲得された証左であるものの、各章ではその中核のみを深掘りするのではなく、社会的および政治的背景を同時に語り、全体の歴史像にどのように位置づくのかを意識していた。とりわけ近現代においては政治が庶民の健康意識に直接影響を与えたことも印象的で、当該テーマから政治史（政策史）を再考する回路が新たに構築されたように感じる。

多少の相違はあれども、社会全体で知識を共有することや、かたや地域内でさまざまな階層や集団が存在して一枚岩になっていないことは矛盾しているように見受けられるが、ひとつの町や村の事例が積み上げられて東アジアの特質が理解できるという説明も可能である。そのように好意を寄せるのは、本編10章には随所に同じ問題意識を持ち、取り扱う対象も近似することがあり、個別論文としての評価はもとより、1冊の作品的価値として相乗効果を十分に発揮できているからだろう。それを最もよく表すのは「言葉」「表現」である。第8章では「風土病」の源流を究明し、第1章のなかでは訳語の特質を語る。ほかの章でも文章表現というところに力点が注がれ、用語の成り立ちや人びとの認識・使用変化にも接続する。また、個別の事例を詳しく紹介したうえに、統計や数値的裏付けを明らかにする姿勢にも共感をおぼえた。近代東アジア社会は世界の動きと重なり、さまざまな要因から急激な人口移動（東アジア内を含む）を経験し、その地域ごとの変容は健康維持や自己管理といった話にもつながるだろう。都市および村落の分析は、それぞれに読み応えのある内容で興味を増幅させる示唆に富んだものだったが、たとえば村落から都市へ、A国からB国へ、という庶民の移動にともなう健康のあり方も他分野との融合に一役買うかもしれない。

最後に、今回のプロジェクトに集う執筆者はいずれも関連書籍や論文を数多く手がけ、貴重な成果を発信している専門家たちである。本書はもちろんのこと、東アジアの社会を理解するためにそれらの論考に倣い、評者自身も検討を深めていきたい。